



発掘された日本列島2006 みどころ紹介

鶴見山古墳と百足塚古墳

福岡県の鶴見山古墳は、527年に九州で反乱を起こした筑紫君磐井の次世代の豪族の墓と考えられています。ここから、武人かたどった石の埴輪、石人が出土しました。石人は北部九州などを中心に分布し、地域性の強いものです。宮崎県の百足塚古墳では、数多くの形象埴輪が出土し、大和政権の大玉で行われた祭祀を採用していたことが分かりました。古墳時代後期の九州では、大和政権の祭祀と、地域独自の祭祀が併存していたのです。

中原遺跡

九州北部、唐津湾に面した古代の役所関係の遺跡です。防人に関する木簡が初めて出土しました。この木簡は8世紀末のもので、甲斐国(山梨県)出身の兵士に食料を支給したという内容です。防人は北部九州沿岸の防衛のために東国から集められた兵士で、この時期にはすでに東国からあらたに連れて来ることはありませんでした。木簡に名前のある兵士は故郷に戻ることもなくの地に土着した人々であり、その望郷の念が感じられます。

遺跡でたどる国際交流

日本列島に展開した文化は、周辺の国や地域との交流により大きな影響を受けてきました。今回は縄文時代から中世に至るまで、出土した資料により国際交流のあゆみの一端をふり返ってみたい。縄文時代の埴輪・土器、弥生時代の青銅器、古墳時代の豪華な副葬品、古代の宮殿と陶磁器、北海道のオホツク文化の遺物、中世の海外貿易によりもたらされた品々など、多彩な資料から国際交流の歴史に思いをはせてください。

